

翻訳書の刊行：『ラヴェルスタイン』

鈴木 元子 (国際文化学科)

アメリカのノーベル文学賞作家ソール・ベロー (Saul Bellow, 1915-2005) の最後の長篇小説『ラヴェルスタイン』(Ravelstein (2000)) を本邦初訳し、この春東京の出版社から出版することができたのは、私にとって望外の喜びであった。

とはいえ、ソール・ベローと言っても、残念ながら、日本ではそれほど名前が知られているわけではない。いや、アメリカ文学と言っても、「それは何ですか？」と聞かれてしまう御時世である。けれども、アメリカでは、20世紀を代表する偉大な作家として広く知られている。全米図書賞を3回も受賞したのは、ソール・ベロー以外にはいない。さらにピューリッツァー賞、及びノーベル文学賞を受賞し、1990年には全米図書基金米文学功労勲章を授与された。

ノーベル文学賞を受賞したアメリカ人には他に、ユージン・オニール、パール・バック、ウィリアム・フォークナー、アーネスト・ヘミングウェイ、ジョン・スタインベック、トニ・モリスン、ボブ・ディランなどがある。これらの作家名からは、たとえひとりの名前であってもそれぞれに何らかの文学的系統やグループが脳裏に浮かんでくる。ソール・ベローの場合は、ユダヤ系アメリカ文学のトップランナーであったということだ。

ユダヤ系アメリカ作家については、『ディヴィッド・レヴィンスキーの出世』(1917) で有名なエイブラハム・カーハンに続いて、20世紀に多くの作家が現れたが、とくに1950年代から60年代のアメリカ文学を席捲したのが、ソール・ベロー、J・D・サリンジャー、ノーマン・メイラー、バーナード・マラマッド、フィリップ・ロスなどであった。彼等の文学作品には、ユダヤ系移民たちが、アメリカ世俗社会(国家)とユダヤ伝統文化との間で葛藤する姿が描かれている。

これらの作家たちは、フィリップ・ロスが2018年5月22日に死去したことで皆亡くなってしまったが、ベローの次の世代のポール・オースターや、孫のような若手ジョナサン・サフラン・フォアなどのユダヤ系作家が次々と現れて、ホロコーストや同化の問題をテーマに小説を書き続けている。

『ラヴェルスタイン』は、語り手で作家のチックと、その親友で政治哲学が専門のエイブ・ラヴェルスタインとの友情を描いた小説である。それは勿論、ソール・ベローとアラン・ブルームとの友人間の愛情を土台にしているが、それのみならず、ベローの最後の小説にふさわしい総決算的な芸術作品に仕上がっていると言えるだろう。ユーモアを交えた特徴的な語り方に導かれて、生と死、哲学と歴史、愛と友情について、行きつ戻

りつ、ふたりの対話は展開していく。つまり、この作品を読む我々は、ベローの愛に惹きつけられ、彼の記憶を通して一緒に旅をしているような気分になる。

昨年度から「英語上級 翻訳」という科目を担当している。翻訳術の将来的展望とは——特許関係の翻訳は高性能の翻訳ソフトの登場で仕事は減少するらしいが、文芸書の翻訳は未だ機械では無理で、人間による翻訳が必要であるらしい。

私はこの邦訳書を出版するまでに、『ソール・ベローと「階級」』(第5章第3節)、『ユダヤ系文学と結婚』(第6章)、『Ravelsteinにみるチックの語りの妙技』(『研究紀要』第16巻)、『彷徨える魂たちの行方』(第13章)と、Ravelsteinに関する論文を4本発表してきた。前後するが、2014年の夏には、ベローの生誕地であるケベック州モンリオールを訪れ、カナダ最古で、かつ世界大学ランキングでは常にトップ20に入っているマギル大学に行くと、大学院図書館でRavelsteinに関する論文や記事をダウンロードして、USBに入れて持ち帰った。これらの研究があって初めて可能となった翻訳であった。

そればかりではない。ソール・ベロー関連の地や、『ラヴェルスタイン』に登場する場所に赴いたのは、今となっては楽しい思い出である。ニューヨーク、イスラエル、エチオピア、シカゴ(大学)、マサチューセッツ州の田舎、ボストン(大学)、バーモント州、モンリオールのラシーヌ、パリ、ポーランドのアウシュビッツと。唯一、邦訳書の出版までに行けなかったのが、カリブ海にあるセント・マーチン島(サン・マルタン)である。今後の課題として、いつかこの島を訪れ、ソール・ベロー夫妻が滞在した夏の家を見つけたいものである。

本学では国際文化演習(ゼミ)で、ここ数年、ソール・ベローの作品を精読している。彼の小説を通して、日本人に未知の世界が開けてくる。日本人のマインドがユダヤ系アメリカ人のマインドに触変して、さらにスマートで、しなやかなグローバル日本人になる、そんな魔法の種のような何かがある彼の文学には潜んでいると思えてならない。

